

小説の世界へ

2024-10-21

野口幹夫

ここしばらく、あるテーマをおって宇宙科学や精神科学の本を読んでいたが、一区切りついたので、小説を読みたくなった。

古い本箱を探っていたら、まず有吉佐和子の「恍惚の人」が出てきてこれから始めた。名前とその内容は聞き知りだったが、読むのは初めてだった。

書き手は、嫁の立場で離れに住む義理の父母の面倒を見ている。

そこで起こりがちな嫁いびりは、普通は義母がするものだが、

ここでは義父が執拗に嫁いびりをして、むしろ義母が中に入って

収めている。その義父が認知症になる。この小説が書かれた

S47（1972年）頃はまだ認知症という言葉はない。ボケとか耄

碌した老人といわれている。

そのボケの進み具合や、しでかす不始末が克明に描かれる。そしてその本人はボケているか

らのんきなものだ。受けた嫁いびりの復讐の余地はなく、生涯にわたり、恐ろしいまでの負

担だけが、この嫁にかかり続ける。そしてボケた本人は、面倒をかけているとの自覚や自責

の念もなく、恍惚の幸せのうちに世を去る。題名の由われだ。なんとも救いのない人間の老

いへの告発の書であった。

この本が告発したエネルギーは強かった。当時からその後しばらく「恍惚の人」はその名前の

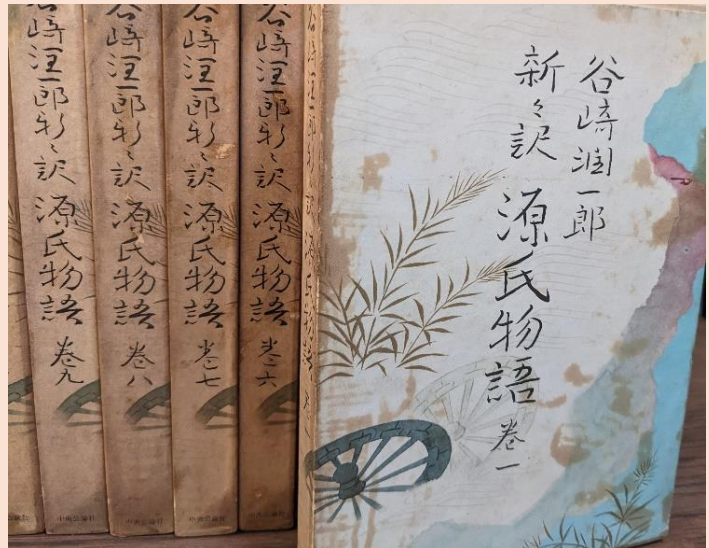
ユニークさで忘れられることなく、老害の解決策を世に問い続けたのだ。そして老後の介護



を家族の負担から解放して、社会制度で見守るという制度が、世界に先駆けて生まれたのはそれから4半世紀経った1996年のことである。さらにボケや耄碌というさげすんだ名称を、医学的な感じで客観的な言葉として「認知症」という言葉が作られ、使われるようになったのは8年後の2004年。やっと半世紀たって日本社会はこの救いようもない個人の地獄の世界から社会全体で解決する方策をつくりだしたのだ。

そんな意味で貴重な告発の書だが、読んでいて苦しく楽しいものではなかった。

それとは別に古い本箱の奥隅に燦然とした美麗本があった、谷崎潤一郎訳「源氏物語」全10巻の美麗本だ。本好きだった父の蔵書の中から私が受け継いだたった3種の本のうちの一つだ。一番重いものは富山房の大百科辞典12巻



次に中里介山著 大菩薩峠全18巻。晩年の父と過ごし、そして見送った姫路の東芝社宅以来我々は3度の引っ越しをしたが、その都度これらを持ちまわっていまも我が家の書棚に異彩を放っていた。「大菩薩峠」は2019年、山梨の東の外れにあるその名の場所を旅行し、そこに記念館があったのを訪ねたのを機会に全18巻を読んだ。高津のHP（交遊の広場19）にも紹介した。

さて最後の父の蔵書「谷崎潤一郎訳 源氏物語全 10 巻」が残っていた。

丁度いまやっている今年の NHK 大河ドラマ「ひかる君へ」の主人公が紫式部であることもあり、この際読んでみようと思い立ち、引っ張り出してきた。彼女は 1000 年前の世界最古の女性小説家である。その意味でも敬意を払って読むべきだ。

この長編はこの時代の宮廷の物語だ。

「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」この冒頭の文は学校でも親しんだので頭に残っている。つまり「ある時代、その時の天皇が大変愛された女性がいた。その女の身分は低かった」からはじまる。彼女は天皇の子供を産んだ、彼女の身分の位は低かったので、その子は天皇の位にはつけず、源氏という名をもらって宮廷を離れた。彼は大変美しく育ったので「光りの君」と呼ばれた。その青年の女性遍歴の物語である。

大河ドラマで、式部が活躍していた一条天皇の時代の宮廷に奉仕する女性たち、道長をはじめとする宮廷貴族や、地方役人たちの生きざまがすっかり身近に感じるようになったので、その物語の筋書きも式部の身の回りの出来事として違和感なく受け入れられるようになっていた。能力を買われて宮中に上がったのに、身分が低いのにと周りの女連から白い目で見られる差別に悩んだのは紫式部その人の悩みでもあった。

全 10 巻の長編なのでひと月はかかるだろうがゆっくりと楽しめそうだ。